

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第36回・最終回)

変わりゆくイギリス、変わらぬイギリス

イギリスには「私には安物を買う余裕がない」という言い方がある。いや、あった。イギリスらしい逆説表現、とも言えるが、文字通り、生活に必要なものは安物を繰り返し購入するのではなく、例えば、ツイードのジャケットなど、良いものを一点だけ購入してそれを一生着る、という発想だ。早くからDIYの店が発展していたことからわかるように、手に入れた品を大事に、自分で修理して使う。あまり器用そうには見えないのだが、たいていの人々が、車や電化製品など、とりあえず自分で修理してみようとする。一生使うほどの物でなければ、なしで済ませるか、リースで一時的に手に入れる。こんなだから経済が停滞するのだろう、と思った。29年前に留学で来た時は。

生活してみてすぐにこの風潮を学んだ。我々夫婦のように期間限定でイギリスに滞在する人間には、例えば、テレビを買う、などということは考えられず、リースを利用した。基本的に家具類はフラットに付随しているが、どうしても使いたくて自分たちで購入したものは、帰国の際、近所の古道具屋(Second Hand Shop)に売り払ってきた。そう、大事に使ったものをいよいよ手放す際にも、捨てるのではなく、こうして再利用に提供し、また、それを購入するののも一つの選択肢で、街にはこういう古道具屋が何軒もあった。

ところが、その16年後(13年前)、今度は子供連れでまたイギリスでしばしの生活をするようになったのだが、だいぶ勝手が違っていった。何やら、量販店が林立し、テレビなど、かなり大型の(だけど性能は大したことない)ものが2万円程度で購入できた。もはやリースという発想がない。逆に、そうやって購入したものをまた帰国の際に売ればいい、と思っていたのだが、昔は、通りに何軒も見かけた古道具屋が、明らかに減っていた。つまり、安い物を買って、新しいのに買い替える時に、捨てる、という、今の日本みたいな使い捨てるの文化になっていたのだ。だからなのか、経済が動いて景気がよくなったらしく、街のあっちこっちが綺麗になったように思えた。

こうして、少しの間にも、イギリスらしい生活風景も変わるようだ。街の景観にこだわり、家の建て直しや外観の変更には厳しい規制があるくせに、ロンドン・アイなるものが登場した時には吃驚したものだ。Et tu, Britain!

とは言え、数か月にわたってここに書き連ねてきたイギリス的な情景は、おそらく、これからも変わらないのではないかと期待する気持ちを否定するものではない(←以前紹介したイギリス的な表現です)。